

第7回日本認知症予防学会学術集会 発表

題名；表情の数値化による認知症症状の評価～無表情による新たな可能性～

氏名；増田洸司¹⁾、郡山裕子²⁾、前原惣一郎²⁾、鎌倉正俊²⁾、武谷克重²⁾、佐々木明子¹⁾、杉山妙¹⁾、
村野賢博¹⁾、末満ひろみ³⁾、加藤一彦³⁾

所属；¹⁾日清オイリオグループ株式会社、²⁾医療法人社団広正会介護老人保健施設 ソレイユカーマ、
³⁾医療法人彦仁会かとうクリニック

【目的】

認知症罹患者は症状の進行に伴い、表情変化が乏しくなり、無表情になるとの報告がある。一部の罹患患者では中鎖脂肪酸油摂取により BPSD が改善し「笑顔や表情変化が増加する」という報告もある。そこで我々は画像センシング技術を用いて中鎖脂肪酸油摂取による表情変化を客観的な「笑顔の数値化」により評価してきた。今回は「無表情の評価」を用いて中鎖脂肪酸油摂取効果の評価を検証し、認知症罹患者の新たな評価軸の有用性を検討した。

【方法】

アルツハイマー型認知症罹患患者である 70 代女性を被験者とし、中鎖脂肪酸油含有食品の摂取前後の期間における表情観察および撮影を行った。観察は被験者の日常生活における表情変化を①介護者による主観的評価と②画像センシング技術による客観的評価の 2 つの手法で行い、中鎖脂肪酸油摂取前後における表情の変化の有無と、その変化に影響する因子の抽出を試みた。

【結果】

<①主観的評価>中鎖脂肪酸油摂取が約 1 ヶ月間継続した時点で、被験者の「笑顔の増加」「無表情の減少」が介護者の実感として得られた。<②客観的評価>表情変化の前後期間を比較した結果、被験者の「笑顔の増加」が認められ、「視線の動き」や「顔の動き」に差異が認められた。

【考察】

無表情であると実感する要素に「視線の動き」「顔の動き」が関与している可能性がある。本取り組みにより、中鎖脂肪酸油摂取による認知症罹患者の改善効果は「無表情」を用いても評価できると考える。以上から無表情の評価は、認知症罹患者の新たな評価軸としての有用性が示唆された。